

## ◆ 帰国のときに

日本の学校には外国の学校よりいじめが多いと思っている人が多いのですが、実際はどうでしょうか。前述したように、いじめの数を数える自体がたいへん難しいことなのですが、多数の子どもたちが一人の子どもに集中的に苦痛を与えるというような場面は、外国の学校でも往々にして見られることです。文学作品の中にもそのような場面は登場しますし、いじめを正面から取り上げたレポートも書かれています。日本の学校で特にいじめが多いというイメージは、あまり客観的な事実にもとづいていないのではないかと思います。

アメリカに赴任することになったとき、おじいちゃんやおばあちゃんに「あんな治安の悪いところに行くのか」と心配された方は少なくないことでしょう。私がアメリカに住んでいたとき、東京で地下鉄サリン事件が起き、学校の同僚の先生から、「危ないから日本に行くのはやめたほうがいいよ。」と言われたことがあります。これから新しい生活を始めようとするとき、わざわざ根拠のない心配をするのは賢明なことではありません。

新しい環境に入ったときは、心が非常に不安定になっていきますから、後になって考えるとまったく意味のない不安や恐怖感に襲われることがあります。私がアメリカに住み始めて間もなくの頃、道で急に話しかけられたことがあります。悪意の人物のように思って、返事をせず足早に立ち去ろうとしたところ、相手が後ろから大きな声を出して来たので怖くなって走って逃げました。今思えば、あの人は私に時刻を尋ねただけだったような気がします。似たような経験は一度だけではありません。

子どもたちにも同じようなことがあるにちがいありません。新しい学校で知らない子に話しかけられ、よく分からないけれども意地悪なことを言われたと思いついてしまうようなことがあっても不思議はありません。ボールをパスしてくれたのにぶつけられたと思ったり、ランドセルを決まった場所に置いてくれようとしたのに取りあげられたと思ったりするようなこともあるでしょう。いったん疑心暗鬼になってし



帰国生も多く参加するサタデー・スクールの英語のクラス

まうと、自分で置き忘れた上履きが見つからないと「隠された」と思い、友達がこちらを見ると「にらまれた」、向こうを向くと「無視された」と感じるようになってしまいます。こうなると周りの子どもたちも付き合いにくくなってよい関係を作ることは難しくなります。そして、心配でたまらないお父さんやお母さんがこの状況を、「日本の学校では外国から来た子はやっぱりいじめられるんだ」と解釈してしまうと悲劇は決定的になります。こうして、誰も悪くないのに「いじめ」の状況ができあがってしまうことになります。

このような「いじめ」に遭わないようにする最善の予防策は、友達が暖かく迎えてくれることを信じて、新しい学校の生活を始めることです。啓明学園中学校の新しい1年生が参加したオリエンテーションキャンプでも、生徒たちは「いじめ」が起きないようにしようと熱心に話し合っていました。どの学校でも、「いじめ」の問題には真剣に取り組んでいます。帰国して入ることになる学校に連絡して、その学校の様子を聞いておくことも安心の材料になるでしょう。



「いじめ」は、帰国を控えた保護者のご質問でもっとも代表的なものです。書の心配に対する、毎日、学校現場で帰国児童生徒と接しておられる佐々先生の分析とアドバイスです。

日本の学校での「いじめ」の数が、増えたり減ったりしますが、それは、「定義」を変えると起こる現象でしょう。子どもの世界での「いじめ」は、定義を広げれば、数限りなくあります。

アメリカにも、いじめっ子(bully)がいて、いじめ(bullying)があります。本当に残念なことです。日本人同士のいじめも見受けれます。

お子さんの変化に気がつけることが第一です。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校  
国際教育センター  
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15  
電話：042-541-1003  
ホームページ：www.keimei.ac.jp  
Eメール：kokusai\_info@keimei.ac.jp